

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(8)

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。また、UCI（いわゆる「郭グループ」）は、日本で集会を行って『統一教会の分裂』（日本語訳）という書籍を広めています。その書には誤訳やみ言改竄が散見し、お父様とお母様が分裂しているかのように論じています。

彼らの主張は、真のお父様が真のお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真のお母様を中心とする統一一家の一体化を損ねるものです。前回に引き続き、UCI側を支持する人々の言説の誤りを指摘していきます。

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真のお母様宣布文サイト（<http://trueparents.jp/>）」の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注、真のお母様のみ言や「原理講論」は「青い字」で、UCI側の主張は「茶色の字」で区別しています。

七、UCI側が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴く(5)

書籍に散見する「み言改竄」の問題・その1

UCI（いわゆる「郭グループ」）側が二〇一六年秋頃から日本で集会を行って広めている金鍾奭著『統一教会の分裂』（日本語訳）には、真のお母様

をおとしめる「み言改竄」や「誤訳」が散見します。

まず、原本である韓国語版の『統一教会の分裂』は、み言を継ぎはぎすることによって真意を歪曲させる「み言改竄」を行っており、日本語訳では、その歪曲した文章をさらに自分たちに都合の良いように悪意を持って「誤訳」しています。以

下、同書（日本語訳）に含まれる「み言改竄」や「誤訳」の問題を暴いていきます。

(1) み言を誤訳し、お母様にはトラウマがあったと思わせる
—お父様が十七歳のお母様を利用して食べた？

『統一教会の分裂』は、真のお父様の次のみ言を取り上げています。

「統一教会は内外が一つになっていません。お母さん一人がどうしたわけか、そのことを残念に思っています。そうであってはならないのです。お母さん自身、今、何か先生に対して、少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べたと考えられています。そんな考えを未だに持っています。話せば、目をこのように大きく開けます。自分の目の上上がるうとします」(127ページ)。

注、これは『統一教会の分裂』

の翻訳文、マルスム選集597-163、二〇〇八年九月九日)

このみ言を根拠に、金鍾奭氏は、「この言及により韓鶴子が十七歳で創始者（注、お父様）に会い、血統復帰神話とも言うべき聖婚式を行った事件を天史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していたことが分かる」(128ページ。注、太字は教理研究院による)と主張しています。

そして、真のお母様が真のお父様から「利用されたもの」と理解していることに対して、お父様は「とがめていた」(127ページ)のたと述べます。

さらには、同書の後半部分において、「十七歳から救世主の妻として生きてきた人生そのものが彼女（注、お母様）にはトラウマであったという観点は、韓鶴子現象を正確に理解するのに必要な、失われたパズルのようなものだ」と筆者は見ている。

韓鶴子のトラウマが本格的に現われ、創始者との葛藤として発展したのは、統一教会分裂の隠された原因であった」(282ページ)などと主張しています。

しかし、以上のような主張は「み言改竄」と「誤訳」に基づいた、真のお母様をおとしめようとするための虚偽の主張にはなりません。

金鍾奭氏は、『統一教会の分裂』（日本語訳）127ページで、前述した真のお父様のみ言を引用しており、そのみ言を、真のお母様が聖婚式についてお父様に「利用されたもの」と理解していたことを裏づけるみ言であるとします。

しかし、このみ言をマルスム選集の原典で確認すると、これは、み言の前後の文章を隠して意味を誤読させ、読者を誤導しようとする悪意のあるものであることが分かります。

まず、そのみ言引用の部分とともに、以下、『統一教会の分

裂』（日本語訳）から、その前後を含めていま一度、示しておきます。

「2008・9・9 モンゴル大会がまさに行われている最中のその日、創始者は意味深長な発言をした。統一教会が内外が一つになっていないと言及したのである。内とは『家庭』を指し、外とは『統一教会組織』を指していることは容易く理解

できる。創始者が誰から何を聞いたのか正確には分からないが、創始者は韓鶴子をとがめていた。『統一教会は内外が一つになっていません。お母さん一人がどうしたわけか、そのことを残念に思っています。そうであつてはならないのです。お母さん自身、今、何か先生に対して、少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べたと考えているのです。そんな考えを未だに持っています。話せば、目をこのように大きく開

けます。自分の目の上上がるうとします。』(注、マルスム選集597-163、二〇〇八年九月九日)

この言及により韓鶴子が十七歳で創始者に会い、血統復帰神話とも言うべき聖婚式を行った事件を天史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していたことが分かる」(127-128ページ)

この『統一教会の分裂』の文章を疑わずに読めば、このみ言でいう「少女の時に何も知らないことをよいことに、利用して食べた」の部分は、真のお母様が真のお父様に対して「利用」されたという思いを持っておられ、それを、お父様が指摘しておられるかのように受け取れるが、原典のみ言を読むと、そうではありません。

また、金鍾奭氏は、真のお父様はそのことに対し真のお母様

を「とがめていた」と述べますが、これもとんでもない悪意のある主張です。以下、『統一教会の分裂』の「虚偽」を暴きます。

(2) マルスム選集の原典を読んで分かる真実
①金孝南・訓母様に対する警告のみ言

金鍾奭氏の間違った主張を理解するために、『統一教会の分裂』（日本語訳）が引用していない、前の部分のみ言を含め、文脈を踏まえながら正確に訳すと次のようになります。

「今からは先生自体を守ってくれなければなりません。誰が守りますか？ お母様が守るべきです。訓母様は代理人です。そんな何か、切り盛りを考えると、それはできません。あるとしても、その思いは息子たち、後継者たちの前に譲り渡してあげなければなりません。そうなのです。

訓母様はそのようになれば、寂しいでしょう！ お父様の愛を夫の愛と換えるなんて……！ サタン世界の愛！ 家ではお父様の愛、離れては夫の愛です。革命です。革命をしなければなりません。そのようにして、持つようになった全てのものを子孫万代、後代に先祖たちのものであるとしなければならぬのです。自分のものであると考えたはいいけません。……(中略) ……統一教会は内外が一つになりませんでした。お母様一人をどうにかするとして、残念には思いません。そのようにしてはいけないのです。お母様自身が今、何か先生に対し、少女の時に何も知らない者をつかみ、利用し食べたと思っているという持っています。話せば、目をこのように大きく開けます。自分の目が上がるうとします」(マルスム選集597-162-163)

真のお父様がこのみ言を語られた二〇〇八年九月当時、金孝南・訓母様が、清平摂理^{ヒョウヘン}を通して築いた基盤は、天城旺臨宮殿、天正宮博物館をはじめ祖祝福、霊人祝福など、実に大きなものでした。また、金孝南・訓母様は、真のお父様のすぐそばで待ることが出来る立場にもおられました。

そんな金孝南・訓母様に対し、真のお父様は、その立場を「誰が守りますか？ お母様を守るべきです。訓母様は代理人です。……譲り渡してあげなければなりません」と語られました。そして、お父様のそばで「お父様の愛」を受けるのではなく、自分の夫のそばで「夫の愛」を受けなさいと語られたのであり、お父様(先生)自体は「お母様を守るべき」なのであって、「訓母様は代理人です」と指摘されたのです。そして、お父様は、

「訓母様はそのようになれば、寂しいでしょう！」とも語られ、「持つようになった全てのもの」を「自分のものであると考えてはいけません」とおっしゃったのです。

金孝南・訓母様の立場は、真のお父様の前に、言わば「愛の基」として、お父様の「愛を独占するかの様な位置」におられたと見ることが出来ます。ところが、自分が築いたと思っていた立場を手放して、お父様のそばを離れ、自分の代わりに真のお母様が現れたことを通じて、金孝南・訓母様は「寂しい」という思いを感じるようになるだろう、と案じておられるのです。そして、そのような思いになる可能性をお父様はご存じであられ、そうならないよう、お父様は金孝南・訓母様を真の愛をもって諭そうとして語られたみ言であると言えます。

したがって、統一教会の「内」とは真の父母様を表し、「外」

とは食口^{シクコ}たち、特にここでは金孝南・訓母様を表しているものと考えられます。ゆえに真のお父様が「統一教会は内外が一つになりませんでした」と語られたのは、統一教会の食口たち、特に金孝南・訓母様が、真の父母と一つになっていないという意味であると言えます。

ここで踏まえておくべきことは、「お母様一人をどうにかするとして、残念には思いません」、「そのようにして……」の言葉の主語は、明らかに金孝南・訓母様であることが分かります。すなわち、この言葉の意味は、金孝南・訓母様が、真のお母様を「どうにかする」、「そのように」するということなのです。

そして、「残念には思いません」の主語は、真のお父様というこ

とになります。

結局のところ、文章の流れ(文脈)を通してこの部分を見ると、「金孝南・訓母様がお母様に対して、嫌がるような何かを行ったとしても、お父様は残念に思いません。しかしながら、金孝南・訓母様はそのようなことをしてはいけません」という意味のみ言として、真のお父様が忠告を込めて語っておられるものであることが分かります。

以上のようなみ言であるにもかかわらず、『統一教会の分裂』の文章は、「統一教会は内外が一つになっていません。お母さん一人がどうしたわけか、そのことを残念に思っています。そうであってはならないというのです」となっています。まるで、お母様お一人が問題であるかのように述べることで、お母様をおとしめようとしているのです。これは、とんでもないみ言の改竄です。

②お父様は、誰かの報告^{コウゴウ}に触れて語っておられる

次に、「お母様自身が今、何か先生に対し、少女の時に何も知らない者をつかみ、利用し食べたと思っているというのです。そんな思いをいまだに持っています」の部分は、誰かが真のお父様に報告した内容であることが分かります。

事実、著者の金鍾奭氏自身も、「創始者が誰から何を聞いたのか正確には分からないが」(127ページ)と述べていることから、金鍾奭氏自身もこの部分が、誰かの報告した内容であることを理解しているのです。

その「誰から何を聞いたのか……」とは、文脈から考えてみると金孝南・訓母様である可能性が高いものと言えます。したがって、誰か(おそらく金孝南・訓母様)が真のお父様に報告した内容を、お父様が全体の前で率直にお話をされたということになります。

したがって、この部分を分かりやすく補足を加えれば、「お母様自身が今、何か先生に対し、少女の時に何も知らない者をつかみ、利用し食べたと思っているというのです。そんな思いをいまだに持っています」(という報告を受けたことを、真のお母様に)話せば……であると言えます。

そして、そのように真のお父様が話すと、真のお母様は「目をこのように大きく開けます」と言われるのです。ここで、お母様が目を大きく開けられるのは、びっくりしたとき、驚いたときの表情なのです。これは、決して、「目をそらす」でも「目をむく」でもなく、目を「大きく開け」られるということです。すなわち、お母様は身に覚えのないことを言われて、びっくりしておられるのです。

結局、これらの文章の流れ、前後を踏まえて読んでみると、この報告内容は正しい情報では

なく、誤った内容であったことが分かるのです。それゆえ、「真のお母様は、身に覚えのない内容をお聞きになり、びっくりされて目を大きく開けられた」というわけです。

著者の金鍾奭氏は、この部分が誰かの報告した内容であり、真のお父様のお考えではないことを知っているはずですが、だからこそ、彼は、「創始者が誰から何を聞いたのか正確には分からないが……」などと述べているのです。それにもかかわらず、金鍾奭氏は「この言及により、韓鶴子が十七歳で創始者に会い、血統復帰神話とも言うべき聖婚式を行った事件を天宙史的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していたことが分かる」とし、「創始者は韓鶴子をとかめていた」などと、ありもしないことを述べているのです。

これは、事実をゆがめた、とんでもない記述です。そして彼は、真のお父様と真のお母様が

葛藤しているかのように読者を誤導しようとして、虚偽のストーリー^⑩を作文しているのです。

(3) 聖婚式はお母様の誇り

では、真のお母様ご自身は、聖婚式に対してどのように思っておられるのでしょうか。結論から述べると、お母様は、真のお父様とのお聖婚を、大変誇りに思っておられます。徳野英治会長は、お母様のみ言を次のように紹介しています。

〔二〇一七年〕四月十二日

(天曆三月十六日)に韓国の天正宮博物館で開催された『真のお母様ご聖婚五十七周年記念式』に参加させていただきましたので、まず、記念式やその前後に真のお母様が語られた内容を紹介します。

今回、真のお母様は、『今後、**聖誕、聖婚、聖和の三つの記念日を柱として祝賀する**』と明言なさいました。誕生、結婚、そ

して死(霊界への旅立ち)は、私たちの人生においても、誰もが主人公になる、三つの大きな節目です。ましてや、真の父母様のご聖誕、ご聖婚、ご聖和は、全人類にとって、歴史上、どれほど大切な日か、言葉では言い尽くせないでしょう。……(略)

……そのご聖婚に、ご聖誕、ご聖和を加えた三つの行事が、今後、全ての名節、記念日の中心として祝われることを覚えておいてください(『世界家庭』二〇一七年六月号、17〜18ページ)

以上のように、真のお母様は「聖婚」を貴い日として、大切に思っておられることがよく分かります。お母様が、「聖誕、聖婚、聖和の三つの記念日を柱として祝賀する」と語っておられるように、聖婚は、お母様にとって誇りなのです。

したがって、金鍾奭著『統一教会の分裂』(日本語訳)が述べる「韓鶴子が……聖婚式を

行った事件を天宙的価値ではなく創始者に利用されたものと理解していた」とか、「十七歳から救世主の妻として生きてきた人生そのものが彼女(注、真のお母様)にはトラウマであった」という記述は、真のお母様をおとしめるための、極めて悪意ある虚偽^⑪であることが分かります。

ちなみに、真のお母様は、ご自身が十七歳のご聖婚のときに、固く「決心」されたことについて、次のように語っておられます。

「私は、神様の摂理歴史を思いながら成長してきました。私が満十七歳でお父様に出会った時、『神様が大変な苦勞をして歩んでこられた蕩滅復帰摂理歴史を、私の代で終わらせる。私が終わらせる』と自ら決心しました(天一国經典『真の父母経』192ページ)

仰が崩壊した人であると見ざるをえません。また、真のお父様に対する信仰についても同様であると言わざるをえません。なぜなら、お父様を心から敬い、侍る気持ちの満ちた人には、このように平然と「み言改竄」や「誤訳」をするなどということはありえないはずだからです。

特に、問題なのは、著者や翻訳者たちが、み言の原典(マルスム選集)に当たってみること、その意味を知っていないながら、その意味をわざと隠したり、改竄したりして論述しているという点です。「真実」を書こうと心掛ける人にとって、み言改竄^⑫や意図的に「誤訳」することは絶対にあってはなりません。そしてまた、このような事実(み言改竄、誤訳等)を知った後において、なおもこの書を広めていこうとする人の場合について、それは真の父母様の位

「私は、『お父様が再臨主として使命を完成、完結したと宣言するために、私の力が絶対的に必要だ。私は誰にも任せることなく、私自ら責任を果たす。私が生きている限り、このみ言は発展し、成功する。サタンを必ず追い払う』と決心しました」(同、193ページ)

以上のように、真のお母様は「聖婚式」に際し、固く決意しておられたのです。そして、ご聖婚五十七周年記念の際には、「原罪なく生まれた独り子、独り娘が、天の願いに従って小羊の婚宴を挙げた日です。天にとつては栄光、人類にとつては喜びと希望の日となったのです」と語っておられます。

このような、お母様の「決心」の強さを誰よりもご存じであられたお父様は、その点について次のように語っておられます。

「私がお母様を称賛するので

はなく、お母様に良い点が本当に多いのです。素晴らしいというのです。それゆえに、そのようなものをすべて見て、お母様として選んだのではないですか。顔を見れば分かるのです。慎ましいのですが恐ろしい女性です。

一度決心すれば、最後まで自分でこの複雑な恨の峠をすべて清算するという決心が、私よりもお母様**が**もっと強いのです。先生は、今七十を超えたので、ごみ箱の近くに行きましたが、お母様は、今ごみ箱を收拾してそれをすべて掃除することができるといって述べたので、先生よりもお母様をもっと重要視することができると統一教会の食口になれば福受けるのです(『生涯路程』⑩ 351〜352ページ)

このように、真のお母様は「聖婚」に際して、真のお父様の前に「お父様が再臨主として使命を完成、完結したと宣言す

相をおとしめようとする。共謀者」の立場に立つのであり、天に対する逆行行為であると言えるでしょう。

『統一教会の分裂』の冒頭には、「読者の方々へ」と題して「本書は宗教学研究の内容です」と書かれています。しかしながら、このようにマルスム選集の原典に当たって検証してみると、この書では、真のお父様が語られたみ言の真意と大きくかけ離れた主張が平然となされており、学術的な研究書であるとは、到底言うことができません。この書は、真のお母様をおとしめる目的をもって書かれた、悪意に満ちた、客観性のない「悪書」であり、小説にすぎません。

私たちは今、このような悪意に満ちた書物にだまされることがないよう、神様と私の関係において「正午定着」を成し、真の父母様と、心情と事情を完全に一つとする自らを備えていかなければなりません。